

# トマト黄化葉巻病耐病性品種「アイタキ1号」の特性

～愛知県で発生しているトマト黄化葉巻病に強い新品種「アイタキ1号」を育成しました～

田中 哲司（農業総合試験場園芸研究部野菜研究室）

【平成25年3月15日】

## 【要約】

農業総合試験場園芸研究部とタキイ種苗㈱が共同で開発した「アイタキ1号」は、トマト黄化葉巻病に耐病性を示す丸玉品種である。食味が良く、愛知県で蔓延しているトマト黄化葉巻病の原因ウイルス「*Tomato yellow leaf curl virus (TYLCV)*」のイスラエルマイルド系統に対して特に耐病性を示す。また、主要病害である葉かび病や萎凋病にも抵抗性を持つ。

## 1 はじめに

愛知県のトマト栽培は、平成22年度作で作付面積528ha、生産数量45,400t、産出額164億円（全国3位）であり、施設野菜で最も重要な品目である。トマト黄化葉巻病は、タバコナジラミが媒介するウイルス病で、日本国内では平成8年に始めて確認され、その後、急速に福島以西で蔓延し、発病すると収量が激減するトマトの重要病害である。本病を引き起こすウイルスの系統は、国内では2系統が確認されており、愛知県ではイスラエルマイルド系統が蔓延している。生産現場からは、トマト黄化葉巻病の耐病性品種を早急に開発してほしいとの要望があった。そこで、愛知県で蔓延しているトマト黄化葉巻病に耐病性を示す新品種の育成に取り組み、このたびタキイ種苗㈱と共同で「アイタキ1号」を開発したので紹介する。

## 2 育成の経過

平成15年度に良食味な果色がピンクの日本品種と海外から導入した赤色でトマト黄化葉巻病に耐病性を示す品種を交雑し、選抜・固定を行い、平成20年度に有望な親系統を育成した。その後、タキイ種苗㈱との共同研究を開始し、この系統とタキイ種苗㈱の葉かび病抵抗性系統とを交雑し、良食味でトマト黄化葉巻病耐病性を示し、葉かび病等の主要病害に抵抗性を有する「試交08-5R（アイタキ1号）」を得た。平成22年より24年にかけて現地適応性検定を経て有望と判断し、平成24年7月に育成を完了した（写真1）。



写真1「アイタキ1号」

## 3 「アイタキ1号」の特性

形態・生態的特性として、トマト黄化葉巻病のイスラエルマイルド系に耐病性を示すほか、タバコモザイクウイルス（*Tm-2<sup>a</sup>*）、萎凋病レース1、萎凋病レース2、根腐萎凋病、葉かび病（*Cf-9*）に抵抗性を持つ。第1花房の着生位置は低く、ハウス桃太郎より収穫

始めが5日程度早めで、草勢は、ハウス桃太郎と同程度、桃太郎ヨークよりややおとなしい。節間長は、ハウス桃太郎と同程度で桃太郎ヨークより長めである。また、灰色かび病の原因となる葉先枯れが少ない。収量は、ハウス桃太郎と同等、多収性の桃太郎ヨークと比較すると、同等かやや少なめである。

果実品質は、食味や揃いが良好で、形状はやや扁平である。大きさは200g程度でハウス桃太郎と同様だが、桃太郎ヨークより小ぶりである。果実の色は、国内で主に販売されているトマトと同様「ピンク系」である。なお、果実肥大がよい時期にハウス内の乾湿差が大きいと裂果が生じやすく、草勢が強すぎると、花痕が大きくなりやすい。



写真2「アイタキ1号の果実」



写真3「アイタキ1号の果実断面」

#### 4 栽培上の留意点

販売されているトマト黄化葉巻病の耐病性品種と同様、「アイタキ1号」もウイルスを保毒する可能性があるため、媒介虫となるタバココナジラミをハウス内に侵入させないように従来通り、目合いの細かい(0.4mm程度)防虫ネットを開口部に展張する。ハウス内でタバココナジラミを発見した場合は、農薬散布等により初期防除を徹底する。また、多肥等により草勢が強くなりすぎると、一般的に花痕が大きくなりやすいので、適正な草勢管理を行う事が必要である。

#### 5 おわりに

今回、食味や揃いが良く、イスラエルマイルド系統によるトマト黄化葉巻病に耐病性を示す品種が育成できた。「アイタキ1号」の優れた特性をより発揮できる栽培法についても、今後、検討をしていく予定であるが、本品種を導入することにより、トマト黄化葉巻病の被害がある生産者の方々の経営安定が少しでも図れれば、幸いである。